

京都市京セラ美術館 2025年度 展覧会情報

特別展「民藝誕生 100年—京都が紡いだ日常の美」

主催：京都市、NHK京都放送局、NHKエンタープライズ近畿、毎日新聞社、京都新聞

2025年9月13日（土）～12月7日（日）

本館 南回廊 1F

思想家の柳宗悦、陶工の河井寛次郎、濱田庄司が京都に集うことで始まった「民藝」運動。木喰仏の調査旅行をするなかで議論を深め、1925年「民衆的な工芸＝民藝」という言葉が生まれました。（※）このたび、「民藝」という言葉が誕生して100年を迎えるにあたり、「民藝」と京都の関係を紐解く展覧会として、特別展「民藝誕生 100年—京都が紡いだ日常の美」を開催します。

※1926年、柳宗悦、濱田庄司、河井寛次郎、富本憲吉の連名で『日本民藝美術館設立趣意書』を発表。1936年、日本民藝館（東京・駒場）開設。



左：木喰上人《地藏菩薩像》1801年、日本民藝館蔵 右：黒田辰秋《根来鉄金具手箱》1930年頃、河井寛次郎記念館蔵

京都と民藝の深いつながり

1923年関東大震災で被災し、翌年に京都へ転居、約10年にわたって居住した柳宗悦。「民藝」という言葉はこの京都で柳らの交遊によって生まれ、彼らは京都の朝市などで雑器の蒐集を本格的に開始します。「民藝」の歩みは、明治末から大正、昭和へと社会が近代化する中で、人々の衣食住の概念を変革させていくものであり、その活動は京都から日本そして世界へと広がっていきます。100年という節目にここ京都で、日本近代化のなかで一般大衆にも広がった民藝運動の無名性、簡潔性や単純さに美を見出す精神を考察することは、あらためて現代の暮らしや生活感情に新しい視点をもたらしてくれるでしょう。

本展のみどころ

「民藝」という言葉が誕生するきっかけとなった木喰仏を皮切りに、上加茂民藝協団で活動した黒田辰秋、青田五良の作品や、「民藝館」「三國荘」のために制作された河井寛次郎、濱田庄司、バーナード・リーチらの工芸作品、柳宗悦らによる日本全国の蒐集品や、芹沢銈介、棟方志功などの民藝関連作家の優品を展示します。また英文学者の寿岳文章、京菓子の鍵善良房、牛肉水炊きの祇園十二段家、民藝の建築を推し進めた上田恒次など京都における民藝運動の推進者や支援者をめぐる作品や資料などとあわせ、京都と民藝との関わりを総合的に紹介します。

特別展「戦後京都の前衛日本画(仮称)」

主催：京都市ほか（未定）

2026年2月7日(土)～5月6日(水祝)※

前期：2月7日(土)～3月1日(日) 中期：3月3日(火)～4月5日(日) 後期：4月7日(火)～5月6日(水祝)

新館 東山キューブ

京都は、近代日本画を牽引する文化的中心地のひとつとして発展し、多くの優れた日本画家の輩出の基盤となってきました。

しかし戦後になると、旧体制の反省の風潮のなかで、伝統文化としての日本画への批判の声が高まり、既存の権威や制度への反発からも「日本画を滅ぼすべし」という主張も見られるようになり、日本画に逆風が吹きます。

そうしたなか、京都画壇では日本画の枠組みを見つめ直し、継承／革新を模索して前へ進もうとする「前衛日本画」の運動が1940年代以降に活発化していくこととなりました。戦後を担う気鋭の若手画家たちがその中心となり、同志が集まり意欲的な美術団体が結成

されます。京都という日本画制作の中心地にいたからこそ、旧態依然とした日本画を身近に批判することができ、日本画の将来を創造する底力を見せることができたといえます。京都市立絵画専門学校、のちの京都市立美術大学もまた、同世代の日本画家たちをつなぐ場となり、前衛運動の基盤となりました。

本展では、戦後京都画壇の注目すべき前衛運動として、創造美術、パンリアル美術協会、ケラ美術協会の3つの団体を中心にして紹介し、日本画の系譜がいかにして現代へつながったのかを振り返ります。

主な出展作家：徳岡神泉、堂本印象、上村松篁、秋野不矩、三上誠、下村良之介 など30人以上

本展のみどころ

1. 総勢30人以上の画家の作品が一堂に

戦後、前衛的な日本画表現に果敢に挑戦し、のちに日本画界を牽引していく有名画家30人以上の作品を展示。戦後日本画の歴史を総覧することができる内容です。

2. これが日本画なの？

戦後に起こった価値観の見直しにより、日本画という枠組みへの解釈も広がり、表現も多様になっていきました。

「優美な」近代日本画のイメージをくつがえす、挑戦的な作品が一堂に見られる機会です。「こうきたか！」という戦後日本画の意外性を楽しんでください。

3. 戦後の京都ってどんなところ？

今回の舞台は、戦禍の爪痕が残る京都の町からスタートします。その復興へ向けて立ち上がった芸術家たちは、創作への意欲と情熱に燃えていました。制作においては、市街や社会の変化が、作品に大きく反映していきます。本展では、日本画の名作をより深く理解するため、戦後の社会状況を語る資料なども同時に展示します。



大野徹嵩 《緋 No.24》1964年
京都市美術館蔵

「第 12 回日展京都展」

主催：第 12 回日展京都展実行委員会（京都市ほか）

2025 年 12 月 20 日（土）～2026 年 1 月 17 日（土）

本館 北回廊 1・2F、南回廊 2F、光の広間

日本最大規模の総合公募展「日展」の京都展を今年も開催します。日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の 5 部門にわたって、全国を巡回する基本作品と京都・滋賀の作家による地元関係作品の計約 500 点をご覧いただけます。



「西洋絵画 400 年の旅—珠玉の東京富士美術館コレクション」

主催：京都市、京都新聞、産経新聞社、関西テレビ放送

2026 年 3 月 20 日（金）～5 月 24 日（日）

本館 北回廊 1F

東京富士美術館のコレクションは、日本・東洋・西洋の各国、各時代の絵画・版画・写真・彫刻・陶磁・漆工・武器・刀剣・メダルなど様々なジャンルの作品約 30,000 点を収蔵し、とりわけルネサンス時代からバロック・ロココ・新古典主義・ロマン主義を経て、印象派・現代に至る西洋の油彩画コレクションは最大の特徴となっています。

「珠玉の東京富士美術館コレクション」をテーマに開催される本展では、その油彩画コレクションから厳選された作品によって西洋絵画 400 年の歴史をご紹介します。



ジャック＝ルイ・ダヴィッドの工房《サン＝ベルナール峠を越えるボナパルト》

2025年度コレクションルーム

当館のコレクションは、近代以降の京都の美術（日本画、洋画、彫刻、版画、工芸、書）を中心に現在約4,400点を数えます。明治期から昭和期の京都画壇の近代日本画・洋画などには全国有数の名品が揃っているほか、近年は世界の巨匠版画を集めたZEROコレクション、また平面表現における現代美術の変遷を30年にわたって捉えてきたVOCA展の受賞作など多数の新収蔵を受けています。コレクションルームでは、竹内栖鳳、上村松園、木島櫻谷など京都を代表する人気の名作紹介に加え、テーマ特集展示を通じて、京都を基軸とした近代から現代の美術の面白さをたっぷりと体感していただきます。

観覧料 一般 ※1 京都市内在住の方：520円/京都市外在住の方：730円、小中高生等 京都市内在住の方：無料 ※2/京都市外在住の方：300円、小学生未満 無料

(※1 京都市在住の70歳以上の方(身分証明書をご提示ください)、障害者手帳等を提示の方およびその介護者1名は無料です。京都市キャンパス文化パートナーズ制度に登録している京都の大学に通学する学生の観覧料は100円です。 ※2 京都市在住または通学の小学生・中学生・高校生・高等専門学校生)

春期 特集「染織をめぐる冒険—京都の作家を中心に」

2025年4月11日(金)～6月15日(日)

京都では、長年にわたり培われた染織技術を基盤に数多くの染織家たちが優れた意匠を生み出してきました。近代以降は、様々な素材を使った撚り糸で豊かな質感を表現した山鹿清華や中村鵬生による手織錦や、1960年代後半以降盛んになったファイバーアートなど、さらに自由な染織の在り方が追求されました。本展では近年の新収蔵品も交え、技法や素材の選択、独自の表現に着目しながら、1930年代から今日にいたる京都の染織作品を紹介します。リニューアル後初めて、北回廊2階での開催となるコレクションルーム春期。広い展示室で迫力の作品をお楽しみください。



左：渋谷和子《太陽への道》1991年 京都市美術館蔵 右：久保田繁雄《海音Ⅲ》2019年 京都市美術館蔵

夏期 特集「洋画の夜明け—黒田重太郎にならって」

2025年6月20日(金)～8月31日(日)

京都洋画壇の重鎮であった黒田重太郎は、画家であると同時に多作な文筆家でもありました。その著作は、フランスを中心とするヨーロッパの美術動向を伝え、西洋美術受容において重要な役割を果たしました。1947年に出版された『京都洋画の黎明期』は、京都を中心に据えた日本洋画全体の発展経過が体系的に記述されており、2006年に増補改訂版が刊行されるなど現在においても京都洋画壇を語る上で欠くことのできない一冊です。

本特集では、黒田が紡いだ京都洋画壇の形成過程を所蔵品で辿り、紹介します。先覚として登場する田村宗立から京都府画学校設立と関西美術会の結成、そして浅井忠の京都来往まで、京都洋画の発展の礎をご堪能ください。



左：田村宗立《官女弾琴図》1897頃 京都市美術館蔵 右：浅井忠《グレーの柳》1901年 京都市美術館蔵

秋期 特集「こどもへのまなざし」

2025年10月24日（金）～12月14日（日）

子どもとは、いったいどのような存在でしょうか。かわいらしくて、純粋。自由で、少しあやうさを感じるもの。こうした子どもに対する認識は、近代になって改めて発見されたものともいえます。

明治期になると学校が創設され、児童教育が発達していきます。その後、大正期にいたって、児童向け雑誌や童謡など、子どものための文化が確立され、文筆家や作曲家など多くの文化人が子どもという存在に視線を向けました。

そうした風潮のなかで、近代の画家たちもまた、その多くが子どもを見つめ、作品に描きました。純粋さの象徴として、あるいは若々しい

生命力を示すものとして、また愛する家族の一員として。子どもを扱った作品は当館のコレクションにも多数存在します。本特集では、子どもをテーマにした絵画作品を展示し、近代における「こどもへのまなざし」を振り返ります。



三谷十糸子《朝》1937年 京都市美術館蔵

冬期 特集「お雛さまと人形の世界 ～ 絵画と共に四季をめぐる」

2025年12月19日（金）～2026年3月15日（日）

京都で江戸時代・明和年間に創業した人形司「丸平大木人形店」の雅やかな人形を、五節句や季節の行事を描いた絵画と共に展示します。丸平は、公家のしきたりである有職を基本とし、装束から調度品に至るまで品位あふれる人形づくりを行ってきました。本展では、宮家や財閥などの名家に愛されてきた雛人形を中心に、丸平ならではの御所人形や衣裳人形、市松人形を、所蔵品の近代画家の作品と取り合わせ、京都に息づく伝統美を振り返ります。



左：北沢映月《娘》1935年 京都市美術館蔵 右：五世大木平藏製《初節句雛人形》1934年 丸平文庫蔵

ザ・トライアングル

美術館のリニューアルを機に新設されたスペース「ザ・トライアングル」(北西エントランス地下1階・観覧料無料)。新進作家の育成・支援の機会を創出するとともに、市民や観光客など来館者が気軽に現代美術に触れる場を提供しています。これまでに累計17人の京都ゆかりの新進作家を紹介してきました(2025年2月現在)。2025年度は引き続き下記4名のアーティストを紹介します。なお本事業には、「新進作家支援・育成事業等のためのチャリティ・オークション&ガラ・ディナー」を通じたご支援をいただいております。

寺岡海(てらおかかい) 2025年6月17日(火)~8月24日(日)

寺岡海はこれまで、写真や映像、音響装置やドローイングなどを用いて、私たちにふだんとは異なった仕方で風景を眺めるように促す作品を制作してきました。雲の表裏をふたつの地点から同時に撮影した写真作品《A Cloud》や自宅に置いた観葉植物をリアルタイムで中継する映像作品《自宅の花を中継する》のように、日常的な風景の中にありながらも私たちが意識を向けることがなかったり、肉眼で見ることができなかったりするものを捉える寺岡の作品は、見慣れた風景にも別の見方があるという想像力を私たちに与えてくれます。本展では、寺岡がこれまで度々取り上げてきた空をモチーフとする新作を発表します。寺岡の作品に触れるとき、私たちの風景の見方はどう変わるでしょうか。



《空を中継する#2》2024年、画像提供：寺岡海

1987年 広島県生まれ。現在、京都市拠点。別々の場所や視点、時間を、映像や立体を用いたインスタレーションによって接続するような作品を制作している。それにより、私たちが認識している「世界」を編集し、「世界」に対する新しい視点を呈示することを試みる。近年の主な展覧会に、個展「You(Me)」(hakari contemporary、2024年)、「逃げ水をすくう」(The Terminal Kyoto、2024年)、個展「春のまえがき」(KUNST ARZT、2022年)、「ウィルヘルミーの吊り板」(MEDIA SHOP Gallery2、2020年)「ニューミュレーション #2 -世界のうつし 展-」(京都芸術センター、2019年)など。

薬師川千晴(やくしがわちはる) 2025年9月9日(火)~11月16日(日)

薬師川千晴はこれまで、「対」という関係性を主題に独自の抽象絵画を手掛けてきました。自作の顔料絵具を両手両足につけ描く「rub」シリーズでは、薬師川の手足の動きを感じさせる痕跡が残された2色あるいは4色の対になった色面が、時にそれぞれの領域を侵食しあうかのように一枚の平面の中に並置されます。また、近年手掛けている「knock」シリーズで薬師川は、画面の向こう側目に見えない相手に向かって合図を送るかのように絵具をつけた自身の手で画面をノックすることで、絵を描きます。

本展では、この「knock」シリーズを中心に据えた新作を展示します。薬師川の作品に向かい合うとき、私たちは画面の向こう側に何を想像するでしょうか。



《knock》2021年
画像提供：薬師川千晴、撮影：片山達貴
「Soft Territory かかわりのあわい」
(滋賀県立美術館、2021年) 展示風景

1989年滋賀県生まれ。2013年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期課程芸術専攻修了。あらゆる「対」の関係性をもとに、身体を介した様々な独自の抽象絵画を展開している。近年の主な展覧会に、個展「knock, knock, knockin' on boundary door. / 境界の扉をノックする。」(GINZA six 銀座蔦屋書店、2024年)、個展「番の絵画」(鎌倉画廊、2023年)、「VOCA展2021 現代美術の展望 -新しい平面の作家たち」(上野の森美術館、2021年)、「Soft Territory かかわりのあわい」(滋賀県立美術館、2021年)など。

佐俣和木（さまたかずき）2025年12月3日（水）～2月15日（日）

佐俣和木は、制作活動と並行してディスクゴルフという競技のプロ選手として活躍する異色の作家です。自らプレイヤーとして競技に参加しながら、アーティストとしてスポーツが孕むさまざまな問題（スポンサーシップ、社会と政治、ナショナリズム、ジェンダーなど）をユニークな仕掛けで提示してきました。さらにそれらの問題を現在のアートシーンが抱える課題と同質のものであるということに発展させていきます。スポーツの実践を通してアートを逆照射することで得られる佐俣の視点は、選手/作家であるからこそその独自性と説得力を持ち合わせています。

本展は、佐俣が美術館という場で行う初めての展示です。スポーツを通して多角的な方向から当館を見つめ、佐俣が見いだす独特の視座と鑑賞者に向けて繰り出すユーモラスな問いかけにご期待ください。



個展「You Dream About?」展示風景、
2024年 撮影：加藤奈々子

1994年町田市に生まれる。2017年多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コースを卒業し、2023年京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。現在、京都市在住。作家活動と並行してディスクゴルフのプロ選手として活躍している。二足の草鞋をはく生活の中から得られる独自の視点で作品を制作し、浮き彫りになった問題に対して再考を促すきっかけを提供する。主な展覧会に「ANTEROOM Transmission vol.2-re + habilies」(アンテールーム京都、2023年)、個展「You Dream About?」(KUNST ARZT、京都)など。

三橋卓（みつはしたく）2026年3月10日（火）～5月17日（日）

三橋卓は、日本画の分野で活躍する作家です。日本画というジャンルを持つ、歴史の連続性を意識しながら歴史上の作品を見つめ、その解釈を作品に反映させています。また「写生」や「自然鑑賞」という行為などが持つ、「自分とものとの距離を測る」役割にも注目。日本画が特徴的に発展させてきた近景・中景・遠景のレイヤー表現について、それを再構成する風景画などを制作しています。



《作品(歩いたり立ち止まったり)》 2021年

1987年京都府生まれ。2013年京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻日本画修了。現在、京都市立芸術大学美術学部の専任講師をつとめる。京都市立芸術大学出身の7人で構成されるグループ「景聴園」のメンバーとしても活動している。近年の主な展覧会に個展「真昼の星を見るために」(ギャラリー恵風、京都、2024年)、「歩いたり、立ち止まったり」(ギャラリーヒルゲート、2021年)など。

お断り：2025年度の展覧会は、京都市の予算が成立することを前提としているため、展覧会に係る予算が成立しない場合は、開催を見送ります。また、社会情勢によっては、会期等が変更になる場合がありますので、あらかじめご了承ください。

広報お問い合わせ 京都市京セラ美術館 広報 西谷・川口・平野

TEL: 075-275-4271 E-mail: pr@kyoto-museum.jp

※広報事務局の記載がある展覧会についてのお問い合わせは、各広報事務局までお願いします

その他の主な展覧会

モネ 睡蓮のとき

2025年3月7日（金）～6月8日（日）

本館 北回廊 1F、南回廊 1F

主催：マルモッタン・モネ美術館、読売テレビ、読売新聞社、キョードーエンタテインメント、京都市

問い合わせ：京都展広報事務局（ネネラコ内）06-6225-7885

第4回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ 2025

2025年4月15日（火）～5月11日（日）

本館 南回廊 2F

主催：「第4回 PATinKyoto 京都版画トリエンナーレ」推進委員会、一般財団法人 NISSHA 財団、京都市

問い合わせ：patinkyoto@gmail.com

松本市美術館所蔵 草間彌生 版画の世界—反復と増殖—

2025年4月25日（金）～9月7日（日）

新館 東山キューブ

主催：朝日新聞社、朝日放送テレビ、京都新聞、京都市

問い合わせ：広報事務局（株式会社 TM オフィス）050-1807-2919

どこ見る？どう見る？西洋絵画！ ルネサンスから印象派まで

サンティエゴ美術館 feat.国立西洋美術館

2025年6月25日（水）～10月13日（月祝）

本館 北回廊 1F

主催：サンティエゴ美術館、日本経済新聞社、テレビ大阪、京都新聞、京都市

問い合わせ：広報事務局（ウインダム）03-5642-3767

"Hello Kitty 展 —わたしが変わるとキティも変わる—"

2025年9月25日（木）～12月7日（日）

新館 東山キューブ

主催：関西テレビ放送、産経新聞社、京都新聞、京都市

問い合わせ：広報事務局（ネネラコ内）06-6225-7885